

# 世界の茶

—主としてインド及びスリランカの茶について—

泉 敬 子

## The Tea in the world

— About the tea in India & Sri Lan-ka —

Keiko Izumi

### はじめに

世界における茶の原産地はアジア南部の亜熱帯であるといわれ、また飲茶の起源は中国であるともいわれる。<sup>1)</sup> 日本に茶の渡来したのは奈良時代にさかのぼるが、史実として明らかにされているのは815年のことである。<sup>1)-4)</sup>

茶(緑茶、ウーロン茶、紅茶)は日本のほか、陸路や海路を通して世界に広まって行き、現在ではヨーロッパ、スリランカ、インド、インドネシア、ケニア、旧ソ連、アフリカ、南アメリカ方面にまで拡大されている。<sup>1)2)</sup>

今回は茶の概念、茶が各国にひろまった歴史及び世界の茶の中で生産量の多いインド及びスリランカの茶について調べ世界における茶産業の現状を知ることが目的として本研究を行った。

### I 茶の概念

茶の学名は *Camellia sinensis* と呼ばれ、ツバキ科の植物である。<sup>6)</sup>

世界の各国での茶の呼び名は図1<sup>5)6)</sup>に示す通りで語源は厦門(アモイ)系の Tay と広東(カントン)系の Cha となっており、その伝播経路も関連性があるのではないかと推察される。イギリスの植物学者ワットやオランダのコーヘン・スチュアートがこれを4つの変種に分類している。即ち中国種、中国大

葉種、シヤン種、アッサム種(インド)等である。<sup>2)</sup>

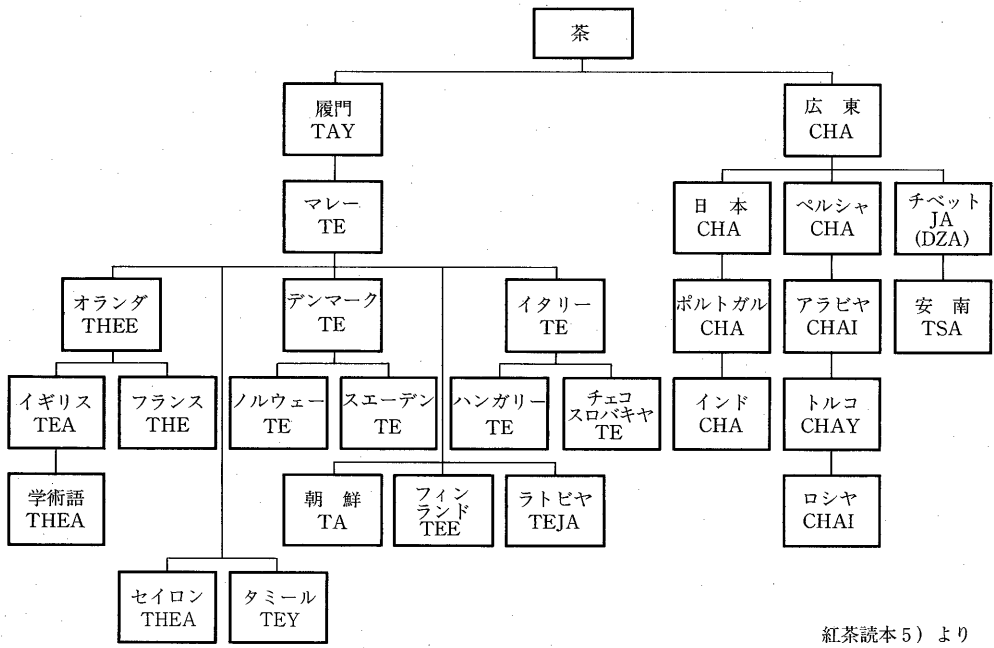
茶の使い方としては、日本では不発酵茶(緑茶)、中国では半発酵茶(ウーロン茶)を用い、ヨーロッパ各地、アメリカでは発酵茶(紅茶)を用いている。同じ茶樹の葉が製造工程により異なった茶として用いられていることは興味深い。今では製造法も技術的に進んでおり、茶の木も緑茶用、紅茶用にそれぞれ適したものが栽培されている。

### II 茶の歴史

茶が世界に広まった歴史をみると、最初に茶をインドに伝えたのは中国の禅宗の初祖ダルマで519年のことである。<sup>2)</sup>

ヨーロッパに茶が伝わったのは16世紀になってからである。ガスベル・ダ・クルスがポルトガル語で書いた当時の文献によれば「高貴の家では一人又は数人の客が訪れるとチャという一種の飲み物を供する。そのものはややにがい赤いくすりで、ある種の薬用植物の混ぜものでつくられている。」と記されている。その後、オランダ、イギリスにも渡ったが、公式の記録としては1610~1630年の間、主としてオランダからそれが出されている。

次に、フランスに茶の伝わったのは1635年(1648年という説もある)といわれ、まず医学的賛否論が優先され、飲用に関する文献が



紅茶読本5)より

図1 茶の呼名

残されているのは40年以上もたった1680年頃といわれている。<sup>2)</sup>

また、茶はイタリーにも渡り珍重されたという記録もある。

一方ドイツでは飲物としてはビールとワイン、スペインではチョコレートとワインに固執して茶は用いられなかった。これに影響されたとも推察されるが、フランスもワインとコーヒーの国に移行し、ヨーロッパでの茶の主要飲用地はイギリスとなった。ところでイギリス人が茶の知識を得たのはロンドンで1598年に「航海談」が出版された時からである。

この本は1595年オランダのヤン・ユイゲン・リンスホーテンが出版した「ポルトガル人の東洋航海記」とその翌年に出版した「ポルトガル領東インド航海記」を英訳したものである。その後、イギリスは東インド会社を創立し、これはインドに本拠をおいて茶その他の貿易をしようとするものであった。

イギリスにおける最初の茶の輸入は1669年

で、その一部が王妃に献上され、宮廷人の間に喫茶の風習を広めたと云われる。

1684年ジャワの政庁はイギリス船の入港を禁じたので、イギリス東インド会社はかねてよりイギリスの貿易業者が足場になっていた履門（アモイ）港から直接に茶を輸入するようになった。履門の茶はすべて紅茶であったので、イギリス人は緑茶を飲用することがなくなった。<sup>2)</sup>

18世紀にはイギリスの茶の消費量が急増して1756年には約400万ポンドを輸入しなくてはならない状況になりイギリスは世界最高の茶の消費国になった。因みに紅茶のメーカーとして有名なトワイニングの会社の創立は1706年といわれ、おそらく世界で最古のコーヒーと茶の会社とみられる。創立者のトオマス・トワイニングは織物業者の子孫であったが、トオマスの時代には毛織業が不況であったためロンドンに移り、コーヒー・ハウスの経営者としてだけでなく茶を主にした商人として事業を発展させて行ったが、現在は日本

においてもトワイニングの紅茶は多くの人々に親しまれている。<sup>5)</sup>

次にアメリカへの茶の伝播はニューアムステルダム（今のニューヨーク）のオランダ人移住者によるものであった。その後、イギリス東インド会社から大量に買い入れるようになった。しかし、事業の独占と課税の問題からいわゆるボストン・ティー・パーティがおり、これが独立戦争にまで発展した。

アメリカは独立後1785年には自国の船で直接中国から紅茶を輸入し、同時にウーロン茶や緑茶まで輸入するようになった。

周知のようにアメリカにはイギリスから渡った人と他のヨーロッパの国々から移民した人があるが前者は紅茶を好むが後者は紅茶よりもコーヒーを好む人が多く、全体としてはコーヒーの国に移行して行った。

1859年横浜開港とともに、日本の緑茶がアメリカに輸出され、アメリカ人の嗜好に合っ

アメリカでは現在90%以上の家庭がコーヒー世帯といわれるが、少数の紅茶世帯ではイギリスと違い殆どの家庭で包装紅茶（ティーパック）を用いてる。<sup>5)</sup>

このほか、カナダにはアメリカからの移住者によって、オーストラリアにはイギリスからの移住者によって茶（紅茶）が伝えられ、何れの国もかなりの消費国になっている。

旧ソ連には1567年中国から茶が入り、古くから茶を飲む習慣がある。他の国と異なり陸路中国から茶を運び1880年の頃には中国の茶輸出量の約2/3は旧ソ連向となっている。

その後は自給をはかるためコーカサス地方に茶園をつくり生産の向上を目指している。

このように中国を起源とする茶は世界の各地に広まって行って行ったが、現在における茶（紅茶）消費国を非生産国と生産国にわけて表1に示す。

### Ⅲ 各国の茶の生産及び動向

次に現在の各国の茶の生産及び動向について述べる。

表1 世界各国の紅茶消費量と国民1人当たり消費量

消費国名		1964~66平均		1970		1980見込	
		消費量 千トン	一人当たり 消費kg	消費量 千トン	一人当たり 消費kg	消費量 千トン	一人当たり 消費kg
非生産国	イギリス	224	4.1	221	3.9	212	3.6
	アメリカ	60	0.3	68	0.3	84	0.4
	カナダ	20	1.0	22	1.0	26	1.0
	オーストラリア	29	2.5	28	2.2	31	2.0
	ニュージーランド	8	2.9	8	2.9	10	2.9
	オランダ	8	0.7	8	0.6	9	0.6
	西ドイツ	9	0.1	9	0.1	11	0.2
	アイルランド	11	3.9	12	4.2	14	4.3
生産国	インド	166	0.3	212	0.4	345	0.5
	セイロン	16	1.4	19	1.5	27	1.7
	東アフリカ	11	0.1	14	0.1	20	0.2
	インドネシア	45	0.4	51	0.4	64	0.4
	中国	126	0.2	140	0.2	170	0.2
	ソ連	72	0.3	78	0.3	101	0.4

紅茶読本<sup>5)</sup>より

表2 主要国の茶栽培面積と生産量

(単位：面積1,000ha、生産量1,000t)

項 目	1975	1980	1985	1989	
世 界 計	面 積	1,527	2,386	2,342	2,673
	生 産 益	1,605	1,866	1,287	1,475
ソビエト連邦	面 積	76	79	66*	79*
	生 産 益	86	130	152	143*
スリランカ	面 積	242	245	232	222*
	生 産 益	214	191	214	207
イ ン ド	面 積	363	378	400	408**
	生 産 益	487	572	657	686**
インドネシア	面 積	102*	86	62	90**
	生 産 益	70	106	132	135
中華人民共和国	面 積	336*	1,157*	1,069*	1,340*
	生 産 益	316*	328*	456	591
ケ ニ ア	面 積	61*	62*	80*	85*
	生 産 益	57	90	147	181**
日 本	面 積	59	61	61	59*
	生 産 益	105	102	96	90

注：\*は FAO 推計値 \*\*は非公式の数字

世界の茶より

世界における茶の生産状況は国連農業食糧機関 (FAO) の統計によると表2の通りである。<sup>1)</sup>

1989年においては茶の栽培面積では中国50%、インド15%、スリランカ8%、インドネシア3%、旧ソ連3%、ケニア3%、日本2%で中国が圧倒的に広い。

また、生産量ではインド28%、中国24%、スリランカ8%、ケニア7%、旧ソ連6%、

インドネシア5%、日本4%となっており、インドが最も多くなっている。

これらの国々の中で緑茶を主体として生産しているのは日本と中国であり、他の国々は旧ソ連が紅茶を主体として緑茶も生産しているのを除けば、ほとんど紅茶のみを生産しているのが現状である。<sup>1)</sup>

茶は製造方法のちがいにより不発酵茶 (緑茶)、発酵茶 (紅茶)、半発酵茶 (ウーロン茶、

包種茶)に大別されるが、最も多く生産、消費されているのは紅茶であり、特に紅茶は生産量が約180万トンで緑茶の約3倍となっている。消費量も緑茶は横ばい状態であるのに比し紅茶は増加傾向にある。

次に生産量の多いインド、スリランカの茶について述べる。

### 1 インド

インドの茶栽培は北インドと南インドに大別される。北インド(北緯22~27°)は夏は高温多湿、冬は低温、乾燥地帯で日本の気候とよく似ている。南インドは北緯7°にそって広がる地域で熱帯性の気候である。

### ○北インド

北東インドでは茶園の殆どを大企業が所有しており、インド全体の75%の茶を生産している。アッサム、カチャレ、ダージリン、ドアース及びテライ等が茶の産地で中でもアッサムは広大な洪積台地であり全インドの半分の茶を生産している。このうちダージリンの紅茶は世界の最高級の茶といわれる。

### ○南インド

南インドは丘陵地帯で、ニルギリ山脈からもたらされる霧に包まれ、ハイ山地による多量の降雨のため、茶の産地として適した地帯である。

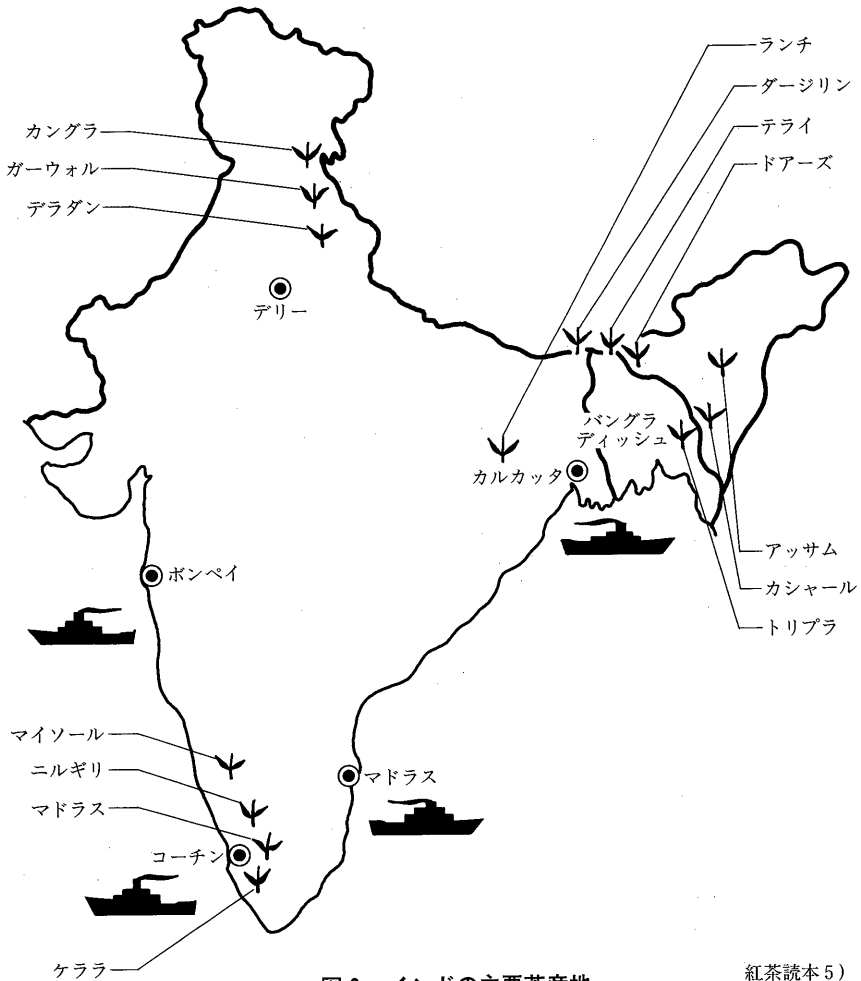
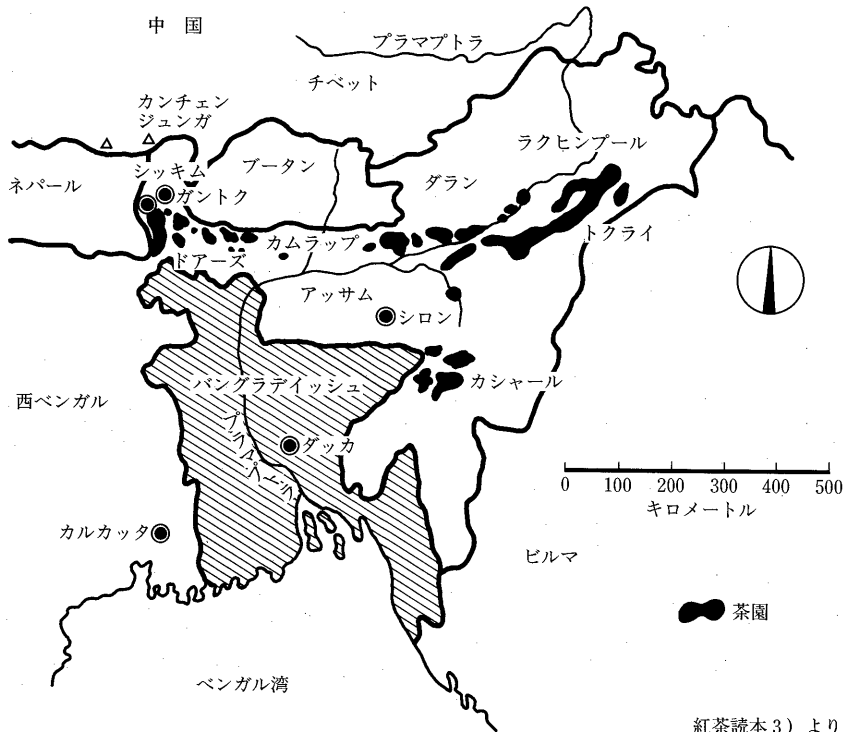


図2 インドの主要茶産地

紅茶読本5)より



紅茶読本3)より

図3 北インドの茶園図

### ○インドにおける茶の歴史

喫茶は18世紀にイギリスの習慣として普及し始めた。19世紀のはじめ、戦争を契機に、中国からの茶の輸入ができなくなると、イギリスは自国の植民地の中に中国にかわって茶を供給する地を求め、インドでの茶の栽培を考えた。1823年にアッサムの貴族マニラム・デーバンの助力を得て、アッサム・ティー・プラント茶園をアッサム州の首都ラングプールに開設した。この地は以前からシンフォ部族の首長らによって自家用の茶が栽培されていた。しかしアッサム自生の茶の木は営利栽培に適しているという評価がなかったため、なお中国から茶の種子は輸入していた。その後、1848年にはデーラドゥン、1851年にカングラ、1856年にダーズリンとカチャルに茶の栽培が始められ、南インドでも商業的な茶園経営が1853年に始まり、現在では世界の生産量の28%を占めるまでに発展した。

1989年の調査によれば、世界の中で、輸出量が最も多く、旧ソ連、西アジア、イギリス等が主な輸出先となっている。<sup>1)</sup>

### 2 スリランカ (セイロン)

スリランカ (セイロン) は19世紀の前半まではコーヒーの産地として知られていた。1870年代の終りにコーヒー樹を枯らす害虫が大発生して数年のうちにコーヒー産業が壊滅する被害にあった。

セイロンではコーヒーと同様に茶の栽培も行われていたが、コーヒーの栽培面積の千分の一程度で比較にならなかった。

しかしコーヒー園の全滅にかわって茶の栽培が次第に進められた。即ちコーヒー園の全滅の前に、1867年アッサム種の種子を植えたテラーの仕事が発展してロンドン市場にセイロン茶が出荷された歴史もあり、コーヒー園の全滅によっても尚、農園に残った少数の農園主や、一度セイロンを見捨てた人が戻っ

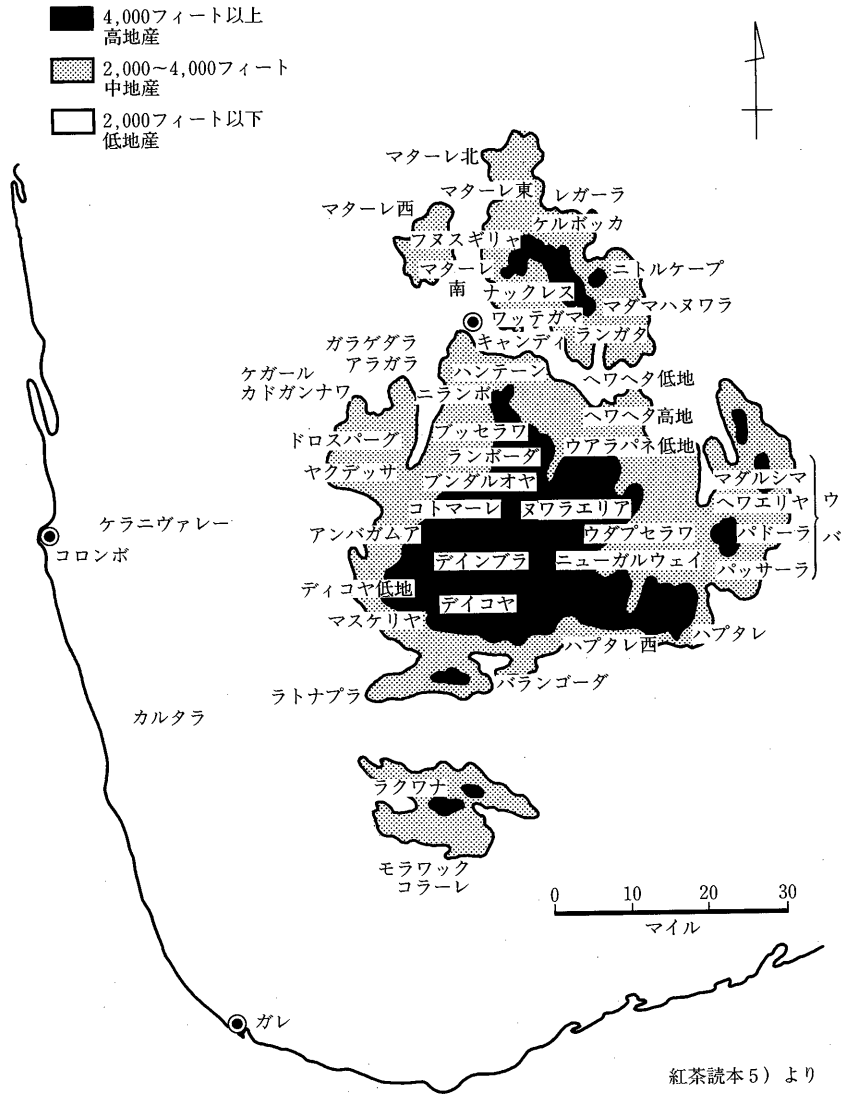


図4 セイロン茶園地帯 (茶園 800ヘクタール以上)

て来て、共に多くの困難に打ち勝ってコーヒー園を茶園に転換させることに成功した。

1990年には世界の茶生産額の約9%を生産し、国際市場での最大の輸出国として世界の輸出茶の約20%を供給するようになっている。

スリランカでは茶生産地は全国的に分布し、標高1200メートル以上の高地、600~1000メートルの中間地、600メートル以下の低地

に大別できるが、最近3年間の生産量では、高地産のもの34%、中間地産のもの24%、低地産のもの42%である。(表5)<sup>1)</sup>

紅茶の銘柄として有名なリプトンは、アイルランド人、トオマス・リプトン(1850~1931)の名をとったものである。1890年、彼は茶の産地を視察するため、セイロンに来て、地価の下がっていたコーヒーの廃園を大規模

表3 茶の生産状況

	1989	1987		
	生産量(t)	生産量(t)	面積(ha)	収量(kg/ha)
インド全体	684,136	674,302	414,232	1,628
北インド				
アッサム	342,023	333,433	192,029	1,736
カチャル	36,703	35,196	34,854	1,010
ドーアス	112,726	119,136	67,422	1,767
テライ	12,689	11,590	20,012	579
南インド全体	151,834	146,878	74,616	1,968
タミルナドゥ		86,348		
カルナタカ		4,254		
ケラ		56,276		

表4 10年毎の茶生産量と収穫の増加

年 代	10年ごとの成長比 (%)	
	生産量	収 益
1930年代から40年代	27.3 %	34.0 %
1940年代から50年代	24.9	23.0
1950年代から60年代	22.2	14.0
1960年代から70年代	35.7	27.9
1970年代から80年代	26.6	16.3
1989の実数	684,000t	1,628kg/ha

表5 インドからの茶の輸出先 (t)

	1940	1960	1980	1989
イギリス	134,780 (86%)	121,123 (63%)	45,509 (20%)	26,700 (12%)
ソ 連	3 (0%)	10,058 (5%)	63,838 (28%)	119,378 (54%)
西アジア	2,737 (2%)	22,570 (12%)	49,308 (22%)	38,527 (17%)
そ の 他	18,470 (12%)	39,135 (20%)	65,371 (29%)	36,085 (16%)
合 計	155,990	192,886	224,026	220,690

表3～表5世界の茶<sup>1)</sup>より



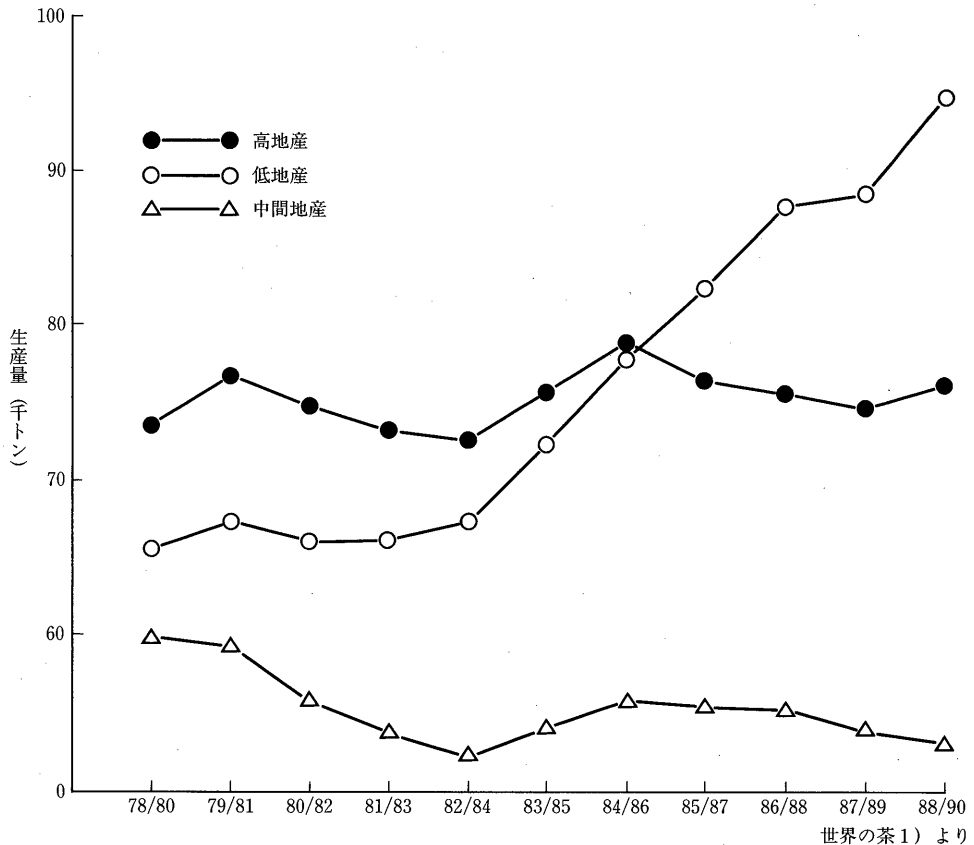


図5 地域別生産量の推移 (スリランカ)

に購入して茶園をつくり茶を栽培し、自分で茶の卸商を兼ね、自家製品を安く売り出すことに力を入れ、リプトンの名前は紅茶の代名詞として使われる程になった。<sup>2)</sup>

以上Ⅲにおいては世界の茶として生産量の高いインドの茶及びスリランカの茶について概要を述べたが、これは1991年8月26日～29日に静岡市で開かれた国際茶研究シンポジウムの際のN. K ジェイン氏 (インド国立CGO 総合研究所遺伝子工学部) 及びP. シバパラ氏 (スリランカ茶業研究所) 両氏の講演の一部を参考にしたものである。

#### おわりに

茶は独特の風味をもつ飲料であり、同時にその成分から種々の保健効果をもつことが知

られている。従って世界の各国で不発酵茶、半発酵茶、発酵茶などとして広く用いられている。不発酵茶 (緑茶) を主として飲用している国民、半発酵茶 (ウーロン茶) 或いは発酵茶 (紅茶) を主として飲用している国民とあるが、一つにはその国々の食事との関連が大きいと思われる。一般に淡白な日本料理には緑茶、油脂を多く用い比較的濃厚な味の中国料理にはウーロン茶、バターや香料などを多く用いる西洋料理には紅茶 (コーヒー) というようにそれぞれの茶が料理と調和のとれた味であることによると推察される。

何れにしても茶は保健飲料・嗜好飲料として、ますます世界各国でその需要を増して行くことであろう。

## 引用文献・参考文献

- 1) 国際茶研究シンポジウム組織委員会編：世界の茶 (1991)
- 2) 春山行夫：紅茶の文化史、平凡社 (1991)
- 3) 橋本実：茶の起源を探る、淡交社 (1988)
- 4) 松下智：日本茶の伝来、淡交社 (1979)
- 5) 斉藤禎：紅茶読本、柴田書店 (1991)
- 6) 中林敏郎他：緑茶、紅茶、烏龍茶の化学と機能、弘学出版 (1991)
- 7) 守屋毅編：茶の文化・その総合的研究 第1部、第2部、淡交社 (1981)
- 8) 守屋毅：お茶の来た道、NHK ブックス (1981)
- 9) 大石貞男：日本茶業発達史、農山漁村文化協会 (1983)